
バリアフリー教育開発研究センター運営委員の紹介

※2020年度体制（職名は当時のもの）

野崎 大地（のざき だいち）

【所属】身体教育学コース・教授

【専門分野】身体教育科学

【センターとの関わり】2011年度から運営委員として参加し、2016～2017年度にはセンター長も務めました。私自身の関心は、脳神経系によるヒトの身体動作の制御・学習プロセスにあります。研究の対象としては、スポーツや楽器演奏など、ヒトならではの洗練された動作はもちろんですが、身体障害からの機能回復も含まれます。心理的、社会的、文化的なバリアなど多様なバリアを扱う本センターの活動にも影響されながら、身体機能のバリアの問題に取り組んでいきたいと思っています。

斎藤 兆史（さいとう よしふみ）

【所属】教育内容開発コース・教授

【専門分野】英語教育、英語文体論

【センターとの関わり】2020年度より、東京大学教育学部附属中等教育学校長として、運営委員会に参加をさせていただいています。中等学校の校長になってみると、普段の学校生活はもとより、入学を希望するお子さんへの対応などにおいてもバリアフリーやインクルージョンの問題に直面し、この問題が単なる理念ではなく、個々の状況において様々な形を取って現れる事案であることを実感しています。星加良司先生にも、具体的な案件に関するご指導をいただき、教職員ともども多くを学ばせていただきました。また、勝亦あき子教諭がバリアフリー教育開発研究センター協力研究員としてセンターと学校をつなぐ活躍をしてくれています。校長の任期は2022年3月までですが、これからも上記の問題について学び続けていく所存です。

下山 晴彦（しもやま はるひこ）

【所属】臨床心理学コース・教授

【専門分野】発達臨床心理学、臨床心理学カリキュラム開発、認知行動療法

【センターとの関わり】センター開設に関わったご縁で、センターがスタートした2009年度から運営委員を務め、2010～2011年度は副センター長、2012～2015年度はセンター長を務めました。センター長であった時期は、私の専門である発達臨床心理学と関連して発達障害の支援についての研究やシンポジウムを主要なテーマとして

センターの活動を展開しました。2016～2017年は、後任の野崎センター長の補佐として副センター長を務めました。

私の最初の就職は、本学の学生相談所の相談員でした。その後に東京工業大学の保健センターで心理相談の専門職として勤務しました。また、このような大学での学生相談業務と並行し、精神科クリニックにおいて精神障害の患者様の問題解決支援を兼業として行ってきました。このような経験を通して心理的問題や精神障害は、単に個人の心理・精神の弱さに原因があるのではなく、社会的ストレス等の環境要因に強く影響されるものであることを認識しておりました。しかも、心理不調や精神障害が生じて、多くの人は、心理相談や精神医療にかかることを避けがちであり、それが問題の深刻化の要因となっていることも認識しておりました。重症化してからご家族等の関係者に促されて来談し、対応が手遅れとなるといった事態にしばしば遭遇しました。問題が顕在化しにくい発達障害の場合には、さらにその傾向が強くなります。相談や治療が開始されたときには、既に問題が複雑化や慢性化していることが多くなります。

このような現象が起きるのは、心理的問題や精神障害、発達障害に関する社会的偏見（スティグマ）があり、それがバリアとなって来談を遅らせていると見ることができます。バリアフリーといった場合、通常は、活動の妨げになる物理的なバリアを指すのですが、このような社会的偏見は、心理社会的なバリアと呼ぶことができます。心理社会的なバリアは、見えにくいだけに見逃されがちです。私は、臨床心理学的観点から、このような心理社会的バリアを解消する方法を研究し、開発しております。

能智 正博（のうち まさひろ）

【所属】臨床心理学コース・教授

【専門分野】臨床心理学、研究方法論

【センターとの関わり】臨床心理学のなかでも特に、コミュニティのなかにおいて障害をもっている方々をどう支援していくかに関心があります。研究では、障害をもっている方におけるライフストーリーや語り（ナラティブ）について質的な探究を行っています。特に人生途中で脳に損傷を負い、失語症などの高次脳機能障害をもたれた方がどのように自分を立て直し再構築していくか、あるいは語り直していくかが私の研究における重要なテーマです。語りは既にわかっていることを言葉にするだけのものではなく、それによって意味を生みだし、本人にとっての「現実」を創りあげます。バリアに関する語りも例外ではないでしょう。このセンターの運営に関わらせていただきながら、個人の体験する「バリア」についてもう一度考え直し、ひとりひとりの人生の文脈のもとで何が「バリア」となり、どういう実践がそれを変化させていくのか、自分なりに考え直していければと思っています。よろしく申し上げます。

東郷 史治（とうごう ふみはる）

【所属】身体教育学コース・准教授

【専門分野】教育生理学、応用健康科学

【センターとの関わり】今年度でセンター運営委員に着任して6年目となります。現在、身体教育学コースに所属し、環境や社会の変化にともない生じる心身問題と、その対応について調査・検討をしているという点で、センターとのつながりがあると考えています。また、センターの誕生に中心的に関わられた武藤芳照名誉教授と衛藤隆名誉教授には、学生時代に、医療、福祉、健康教育の課題としての多様なバリアの存在について学ぶ機会を頂いたということは、私のセンターとの関わり原点となっていると思われます。専門分野では、思春期の子ども、勤労者、高齢者等のさまざまな年代での心身問題の予防と改善を日常生活の中でどのようにすすめることができるかという課題について、心身や環境のバリアの存在を注意深く捉え認識するとともに、またそうしたバリアの解消を目指すバリアフリーのあり方を視野に入れながら、検討していきたいと考えています。

額賀 美紗子（ぬかが みさこ）

【所属】比較教育社会学コース・准教授

【専門分野】教育社会学・比較教育学

【センターとの関わり】2020年度より運営委員を務めております。私は人種・エスニシティの面でマイノリティになる子どもたちの包摂に関心があり、特に移民背景をもつ子どもとその親たちが受け入れ社会で直面する困難を研究しています。労働力不足を背景に日本でも移民受け入れが急速に進んでいますが、その子どもや親たちのウェルビーイングを支える政策や実践は未だ不十分です。一方、移民の包摂はグローバルな課題であり、移民の歴史が長い先進国では社会的公正の実現に向けた様々な取り組みが行われています。社会の周縁に留め置かれるマイノリティの子どもや親の生活経験をフィールドワークを通じて丹念に見たり、国際比較の視点から検討することで、かれらの困難を生み出す日本社会のバリアを明らかにし、どのように障壁を取り除いていけるかを考えています。また、このセンターと関わりながら、人種やエスニシティがジェンダー、セクシュアリティ、障害、貧困などのマイノリティ性とどのように交差するのかという視点を育み、さまざまな差異が尊重される公正な教育と社会のありかたを考えていきたいと思ひます。